

T-Cha

Shigeru Ito

Akiko Shiihara

Shin Nakajima



動く都市計画 文化と開発の 両輪で 未来の東京を 描く

御年91歳ながら、常に頭と手を動かし、東京という都市の未来について考えを巡らせている都市計画家の伊藤滋先生。都市計画というマクロな視点と、住宅設計を出発点とした伊藤先生ならではのミクロな視点を行き来しながら、手触り感と解像度の高い洞察力で暮らしと都市に関する考察を行っています。

東京文化資源会議では、創設時から伊藤会長のもと様々なプロジェクトが立ち上がり、文化資源の保全や活用に向けた新たな活路を見出す取り組みを行ってきました。リノベーションまちづくり制度研究会における容積移転を活用した文化資源保全のスキーム作りや、東京の街と街をつなぎ人々の生活圏におけるゆるやかな移動とそこで営まれる豊かな都市生活を提案するトークョートラムタウン構想など、これからの東京に求められる姿を克明に提言してきました。伊藤先生が語る「理屈だけでなく、実践を伴うことが必要だ」という理念を根底にこれまで活動して



きました。

そんな東京文化資源会議は、新たなフェーズに移行するため2022年の総会を経て伊藤先生から吉見俊哉（東京大学教授）先生に会長を交代しました。現在、吉見新会長の

もと次なる展開に向けて動き出しています。もちろん、顧問となられた伊藤先生も引き続き当会議の活動やビジョン構築にお力添えをいただいています。また、伊藤先生自らも精力的にこれからの東京の未来について考える日々を過ごされています。

今回、当会議の幹事である椎原晶子さん（たいとう歴史都市研究会）と中島伸さん（東京都市大学）とともに、これまでの東京、そしてこれからの東京のあり方について伊藤先生にお話を伺いました。

身体性をもって都市を考えること

インタビューの開口一番、伊藤先生は「50分の1図面描いてる？」と



問いかけます。そこから、伊藤先生の建築人生の始まりである住宅設計によって築かれた、身体的かつ人間的なスケール感覚をもとに都市計画を行うことの重要性について語ってくださいました。

「50分の1の図面を今でも私は描いてるよ。リアリティのない都市計画は住宅の細かいところまで手がけた経験がないからそうなってしまおう。空間において光がどう入ってきて、日陰がどうなるか、天井高の微妙な違いで人が感じる居心地の良さも変わってくる。日常の何気ない寸法をすべて把握していないと建築なんて

もんはできないよ」伊藤先生は、当時、大工と一緒に20分の1スケールの精密な図面も作っていたとのこと。住宅設計の精密さから人間の距離感、身体的な空間を理解しながら、俯瞰した目線で都市全体を考えることで人間らしい都市のあり方につながると伊藤先生は話します。「建築と都市の狭間をい

ったりしながらつなぐ存在が希有になっっている今、そうした存在に私たちがならなければいけない」と、中島さんは語ります。工学部出身の建築家という存在意義を、改めて次の世代に伊藤先生は語ってくれました。

これからの東京をどう表現するか

伊藤先生は、皇居を中心とした東京を東西南北に分け、将軍が居と構えた江戸時代から、どの地方から東



京にやってきた人々がどの地域に住み、どんな職を営み、どんな生活をしてきたのかを考察し、東京という都市を分析してきました。しかし、そうしたこれまで自身が提唱してきた考えをアップデートし、新たな東京の都市の見方を試みようとしています。

「東西南北に分けた分析はたしかにきれいだが、この考え方は過去や現状をただ語っているだけにすぎない。重要なのは、これからどうなるかを考えること。国際的な見地に立った時、東京という都市の発展を考える道標となるのが必要だ」（伊藤）

そこで、都市部の中心ではなくその外側にある場所が活発に動き、そこから内側へと徐々に波及していくという考えのもと、新たな都市の見方を提示しています。例えば、上野国内を見れば東北や北陸の新幹線の玄関口であり、国際的にも成田空港からの玄関口でもあります。また文化資源区を中心として、江戸から現

代に続く文化拠点でもあります。新宿は、山の手、副都心の中心であり、渋谷も1丁や若い人たちが集まる活気あふれる場所です。品川は羽田空港との接続や東海道新幹線などの接続があり、多様な人たちが交差する場所です。東の方では豊洲は国際性があり、かつ幕張のような国際的な場所ともつながっています。

こうした都心の周辺にある個性が際立っている街が、外からの影響を受け入れていくだけではなく、その街々を結び線にある都心部の街へと波及させていくことで、街々において文化的なつながりや影響、それまでとは違った化学反応が起き、新たな都市化の機運の高まりを感じさせるといふ分析を行っています。

「これまでのような同心円型の都市ではなく、街と街を結び位置関係から東京という都市を新たに見出すことで未来を考えてみる。街の個性を結びつけ、それらの節にある街に新たな都市化の機運が起きつつある場所に着目することで、まさに現在進行形で起きている都市の中の動きをつかみ、都市の未来を考えていくことができるのではないか。こんなことを今考えている」（伊藤）

点としての街だけでなく、線を引き街と街をつなぐ線として、そしてそれらの集合体としての都市全体を俯瞰する、新たな考え方によって、都市の見方を一変させる試みです。

ボールを遠くに投げて未来から現実へと引き寄せる

伊藤先生は、イメージで固まりきった止まった都市の姿ではなく、まさに都市が動いている姿をもとに都市の未来を描き出そうとしているのです。伊藤先生が考える「動く都市計画」の考え方にに対し、「同心円型は分析し評論する都市計画や都市の歴史を振り返る解釈ですが、このアプローチはこれからの都市をまさに動かしていくための方法論ですね」と、椎原さんは語ります。谷中・根津・千駄木というフィールドで活動している椎原さんにとって、都市の中で起きている活動に目を向けた上



で、東京全体を考えることの意味を日々実感しています。同時に、街が開発によって変化する有り様をどのように捉えつつ、未来の都市に思いを馳せるかが鍵だと話します。

「東京という都市における歴史と文化について話すことが度々あります。そのなかで、文化だけでなくビジネスを踏まえて東京のあり方を提示していくことの重要性を感じます。企業の方々は1年先3年先はきっちり考えるが、5年先10年先となるとビジネスの現場では確定できることは少ないようです。だからこそ、30年後のようなもつと先のビジョンがあることで、都市の未来の方向性に新たな可能性を見出すヒントとなりませう」(椎原)

都市計画家とは、15年後、30年後の都市の姿を想像し遠くにボールを



投げつつも、現実の足場で起きている事象を捉えながら、現実と未来を引き寄せていく仕事といえます。社会に対して都市のあり様を提案すること、都市の見方を一変させ、そこから変化をもたらす、都市そのものが動いていく状況をつくりあげていくことが、都市計画の醍醐味といえます。

「何もビジョンがないままでは、誰も良い方向に踏み出すことはできません。提示されたビジョンに対して、みんなが『それだ!』と思つてもらうことで、その方向に動き出す一歩が踏めるといふことの大事さを伊藤先生から学ばせてもらっています」(椎原)

文化資源を守ることと開発を両立させるには

未来を考える上で、都市の文化をどのように保全・活用していくのかも並行して提示していかなくてはなりません。これまで東京文化資源会議は文化資源区という空間を提示しながら、東京における文化資源の価値や可能性について追究してきました。しかし、地価が高騰する東京では、古い建物を運営し採算性を確保するのは難しい。所有者がいかに保存したいと思つていても、経済性の観点から保全や活用の仕方を見出さずらく、結果的に取り壊されてしまうというケースも多くありました。

一方、経済合理性の判断だけを繰り返すことで、結果として都市から文化が消失し、無機質な場所となり人が集まってもそこで新たな文化や活動が生まれぬ場となつてしまします。経済性と文化の両立をいかに可能にするかは大きな命題です。

「開発を通じて人や産業が盛り上がることはあります。しかし、ただ古いものを壊して新しいものを作り続けることばかりを繰り返しては、価値あるものを目減りさせているだけです。それを繰り返せば、外国の人が東京に来て文化がないと飽きられて帰ってしまう。ただ働きにきて終わり。文化があつて、川があつて、古いものがあつて、そして新しいものもある。だからこそ、東京で遊び、遊ぶことが面白い」(椎原)

これからの文化資源区 これからの東京と向き合う

短期的な利益追求ではなく、成熟し続ける文化的な価値と開発を両立させるか。そのためには、国際的な視点や見地から日本の文化資源の価値を評価し、保全・活用していく道筋を作る必要があります。

「大規模な開発と文化資源を保全することをセットにすることで、開発をしつつ文化を保全するスキームのような、大きな考え方をする必要がありますかもしれません」(椎原)

東京文化資源会議では過去に、東京オリンピックの際に各国のオリピック委員会が開催都市にて歴史的



建造物等で自国の文化体験を提供する「ナショナル・ハウス」の誘致を行ってきました。誘致活動を通じて、さまざま苦労やアプローチ方法の知見を踏まえて、さらなる提案の可能性について中島さんは話します。

「今ある良いものを、ただ単に『良いものですよ』と伝えても相手はなかなか動かない。海外の人も魅力を感じるような環境や開発を踏まえながら、東京でこういう展開したいという考えを磨きあつていくことで、誘致や文化資源への興味関心を引くことができるとも思います。そうした考えのもとに、文化資源と開発が両立する方法を考えてみたい」(中島)

伊藤先生が試みているこれからの東京を分析するアプローチに立つた時に、それぞれの街の個性が際立れば際立つほど、街々の間が思わぬ発展を遂げるという動きを踏まえ、そうした新たな都市化の機運をキャッチアップし投資を促すこともできると話します。

「街と街のつながりを生み出す活動こそ、これまで東京文化資源会議で

実践してきたことです。街と街をつなぐものとして、トラムのようなスローモビリティがあるということも再認識できました。今まさに動いてる都市をつかみ、そこからどう次のビジョンを提示していくかを改めて感じました」(中島)

新たな遊びや生活から育まれる文化

都市とは、ただ仕事をするだけの場所ではなく、そこで暮らし、生活し、遊び、交流することで、そこから新たな文化が育まれてきます。新たな都市化の機運は、そうした遊びや都市の中にある新たな生活圏から生まれてくるはずですよ。

ポストコロナ社会を見据えた時に、文化的な価値を生み出す街と街をつなぎ、通勤するためだけの東京ではなく、新たな遊びや生活から文化を醸成していくことがより求められてきそうです。そのためには、歩いて楽しめる場所、人が滞留したり滞在したりできる場所によって、人と人との交流が生まれる、そうした、遊びと文化の関係を紐解きながら、都市における文化と開発を両立させる、これからの東京と向き合うことが大切だと実感します。

東京文化資源会議としても、こうした新たな都市化の機運をつかみながら、産官学民が連携しながら次なる活動を展開してまいります。

食と礼と祈り 崖東夜話 第三夜開催

一昨年から企画している学術・宗教施設の共同イベント「崖東夜話」を今年も開催いたします。江戸・東京の精神文化に深く関わってきた神社、お寺、教会など学術・宗教施設の過去や現在を、多様な視点から紐解く「崖東夜話」。3年目となる今年度は、共通テーマとして「食と礼と祈り」をもとに、シンポジウムや各施設による講話などが行われます。

第一部では、パネルディスカッションとして、「食を通じて祈りを考える」をテーマに、各識者の方々と交えた議論を重ねます。人が生きていく上で欠かせない「食」は、生理学的なものだけでなく、日常生活における精神的な充実や家族や組織における絆を作るものでもありません。そうした行為が、コロナ禍を通じてその重要性を再認識することとなりました。第二部では、各施設における祈りや儀式の中で食の持つ意味を考える内容となっています。

そして、第三部では、ノーガホテル上野東京とコラボし、崖東夜話特別夕食プランをご提供いたします。崖東夜話にちなんだ料理を食べながら、「食と礼と祈り」について考えます。

イベント日時：11月9日。イベント詳細は公式サイト (<http://gatiyawajia.jp>) をご覧ください。

10代と巡る上野 ポッドキャストで 街の魅力伝える

上野の街とつながりながら、上野公園の新たな活用方法を提案する上野ナイトパークコンソーシアムでは、コンソーシアム企画の情報発信ツールとして、ポッドキャストを運営しています。ポッドキャストでは、10代向けのクリエイティブスクール「GAKU」とコラボし、10代の若者視点で上野に点在する文化施設の魅力や、街の楽しみ方について発信をしていきます。

先日、ポッドキャストの収録として、東京国立博物館での作品鑑賞や大丸松坂屋上野店などを巡りながら、上野の街を楽しみながら10代の若者が語らう企画の収録を行いました。

10代の視点から、美術館の作品はどのように映り、どのようなところに面白さを感じるのか。そして、上野の街なかに点在する様々な歴史的文化的な資源を、どのように楽しめるのか。可能性とともに、今後の課題を浮き彫りにさせながら、10代や若者にとっての上野という街の魅力や今後の可能性を追求する企画となっています。

配信が決まりましたら、皆様にもご案内させていただきます。ぜひご視聴くださいませ。



編集後記

9月中旬、学生との会話の中でハロウィンが話題にあがった。もちろん古代ケルト人のお祭りサウィンが起源であるなんて話ではなく、渋谷の仮装が今年はどうなるのだろうかという内容だった。一昨年の崖東夜話第一夜で多摩美術大学の鶴岡真弓先生からケルトやハロウィンのお話を興味深くうかがったことを思い返すと、いまの日本でのハロウィンとは民族の誇りを持った意義深い催しではなく、多くの若者が大いに楽しむイベントであることに少し残念な気持ちにもなった。しかし、クリスマスも然り、もっと言えは初詣もそうかもしれないが、さまざまな歴史的な文化や宗教をいまの空気感でアレンジして楽しむ日本文化の寛大さを誇ることも大切だとも気づいたのでした。(陸)

季節は秋となり、過ごしやすい天候になりました。同時に、秋は様々なイベントが催され、街も活況づいてきました。世の中をみると、コロナ後の社会へと次第に移行し、旅行なども復活の兆しが出てきています。同時に、このコロナを経たなかでの新たな生活スタイルや価値観の変化が、多くの人たちにあって旅行や趣味、その他多くの文化的なコンテンツを楽しむ方法や環境が一変したことは明らかです。こうした時代の変化に応じながらも、オンラインではなく実空間で人と人が身体的にも近い距離でコミュニケーションすることの重要性を再認識しています。より、その価値観は広がってくるかもしれませんが、将来、実際に対面で会うことの重要さや意味は今よりもはるかに高い物になっていることでしょう。(江)

[ティーチャ] 東京文化資源会議ニューズレター No.20

渋み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：鈴木渉 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2022年10月30日

〒110-0005 東京都台東区上野2-11-1藤井ビル3階 TEL：03-5244-5450 MAIL：info@tcha.jp URL：http://tcha.jp/

